

優 秀 賞



これからの秋田大学を 生涯学習の視点から考える

教育文化学部 地域文化学科 3年 田口志織

要 旨

本論文は設定されたテーマに対し生涯学習の視点から考察を行った。なぜ生涯学習に焦点を当てたかという、教養や趣味というものは人生を豊かにし、自分の可能性を切り開くことができる。それを可能とする役割の一つに生涯学習や社会教育があると思う。また、高齢化が著しい秋田において健康寿命の増進にも気持ちの張り合いという意味で十分有用だと考えられる。この理由から生涯学習や社会教育に焦点をあてた。また、大学は研究機関であり教育機関であるので学習をヒントとしこのキーワードを選んだ。

内容は生涯学習や社会教育の定義を確認したのち、秋田大学で行われている生涯学習事業や県が行っている生涯学習についてみていった。つぎに生涯学習に対するニーズを知るために聞き取り調査やアンケート調査を行った。その結果をもとに最初に設定した仮説に対して確かめる形でまとめた。

論に取り組むにあたり仮説は次の通りである。生涯学習や社会教育は生きるうえでの心の張り合いになり、また異世代の交流になるから秋田県や秋田大学の将来を見据えると積極的に展開していく必要があるという結論に達すると予想した。結論を導くために秋田大学の科目等履修生である小山澄子さんにお話をうかがったり、秋田大学に勉強しに来ている一般の方にアンケート調査にご協力いただいたりして論を補強した。また、私の短大時代の経験も交えながら考察を行った。

結論としては生涯学習を秋田大学が積極的に推進していくことには大きなメリットがあるとした。一方で実際運営していくと秋田県の広さや協力者の存在、お金の面での問題など、問題点を考えると尽きないと思う。けれどもそれ以上に、市民に専門的な学びの場を与える方が大きな意味があるだろう。そして地域とともに歩んでいく未来が望ましく、地域もそれを望んでいるだろうと推測する。

本論文を書くにあたり、原義彦教授や和泉浩教授、調査にご協力いただいた小山様をはじめ皆様に多大なるご協力をいただき本当に感謝している。

論文

1. はじめに

私は、この論文の課題に対して、生涯学習・社会教育の視点から述べていきたい。その理由は次の通りである。

秋田県は少子高齢化が進んでいる。それを止めることはすぐにはできない。その間にもますます高齢人口は増え、県民がより豊かに生きる方法を模索することが必要と考えられる。この豊かさとは経済的な豊かさだけでなく、内面的な豊かさもある。ここでは内面的な豊かさに焦点をあて、それは生きがいや教養や趣味、コミュニケーションなどといった多岐にわたることを定義する。

教養や趣味というものは人生を豊かにし、自分の可能性を切り開くことができる。それを可能とする役割の一つに生涯学習や社会教育があると思う。また、健康寿命の増進にも気持ちの張り合いという意味で十分有用だと考えられる。この理由から生涯学習や社会教育に焦点をあてた。また、大学は研究機関であり教育機関であるので学習をヒントとしこのキーワードを選んだ。

仮説としては、生涯学習や社会教育は生きるうえでの心の張り合いになり、また異世代の交流になるから秋田県や秋田大学の将来を見据えると積極的に展開していく必要があるという結論に達すると予想する。これは介護等体験の介護福祉施設での5日間の研修をしたときに、利用者さんが算数やクロスワードを積極的に行っていたことから推測した。理由はポケ防止になるからだという。だが、実際のニーズが分からないので今回は高齢の方に話を聞き、結論に対する論を補強したい。

考察を始める前に生涯学習と社会教育の意味を示しておく。生涯学習とはその名の通り「生涯にわたる学習」(注1)である。その領域は広い範囲になっている。「子どもは家庭でのしつけを通してさまざまなことを学び、また学校では教師から教育を受けて学習しているが、それらの学習も生涯学習の一部である。成人期や高齢期には生活課題に関わって多種多様な学習が行われている。就職、転職、再就職を目指して職業的な知識・技術を身につける学習、家庭教育に関わる学習、家族の健康の維持・改善を図って健康や栄養の知識を身に付ける学習、充実した生活を望んで生きがいを追及するために行う学習など、さまざまである」(注2)としている。

次に生涯学習と類似分野の社会教育について触れておく。社会教育は絶えず変化する社会に柔軟に対応するための学問である。教育基本法には第12条に「個人の要望や社会の要請にこたえ、社会において行われる教育は、国及び地方公共団体によって奨励されなければならない」としている(注3)。国や地方公共団体は財源確保や機会提供をすることができるが、実際に企画運営をしていくには行政だけでは難しい場合があるだろう。社会教育には学校や民間団体の力も必須であると考えられる。社会教育は大学との連携もあり、それについて『地域をコーディネートする社会教育』から抜粋する。

「大学は、教育研究の成果を基にした公開講座の開催や地域の産業振興、地域医療・公衆衛生、芸術文化の普及や文化財の保存・活用、スポーツや健康増進、防災や環境保全、過疎対策など、社会や

地域における様々な課題解決や地域の活性化に貢献している。今後、地域の実情に応じて、地域との相互交流をさらに促進し、地域から信頼される地域コミュニティの中核的存在としての機能強化を図ることが求められている。

社会教育行政としても、今後、多様化・高度化する地域の課題に対応し、地域の活性化を図っていくためには、人材や情報・技術など様々な資源を有する大学等との連携・協働が不可欠であり、社会教育担当部局からも積極的に働きかけを行っていくことが求められる。」(注4)と書かれている。

以上が生涯学習と社会教育についてである。つぎに秋田大学ではどのような生涯学習を行っているかみていく。

2. 秋田大学が行っている生涯学習について

秋田大学でも生涯学習を行っている。その開催実績は大学のホームページから見る事ができる(注5)。たとえば昨年度では横手市で防災教室が開催されている。これは全年齢を対象にしていると同時に、災害が頻発する時代のニーズに合っている。地域との交流においては特に横手市を中心に行われている。また産学連携や小中高大連携があり、幅広い年齢層に対する学びの場を提供しているように見える。

だが、特に小中高生に対する生涯学習や連携は学校単位の受け入れのように思われる。たまに中高生が授業見学に来るが、学校単位の受け入れで、県外や遠方の中高生が秋田大学の授業に触れる機会が少ないのではないかと思われる。これは完全に開かれているわけではなく、魅力を伝える機会やアカデミックな授業を体感する機会が少ないように思われる。大学のオープンキャンパスの時に体験できるのでないかと思う人もいるだろう。しかし、教育文化学部の地域文化学科では模擬授業が無く、実際どのような授業が開かれるのか分かりにくい。もちろん、在学生との交流を通じてヒントを得る場合もあるが体感しないとわからないこともある。たとえば、私は受験生だったころ、東北大学、岩手大学、弘前大学のオープンキャンパスに行ったが、どの大学でも模擬授業が行われていた。また、私の母校である山形県立米沢女子短期大学も行っていたし、編入学先を探しに訪れた福島大学、東北芸術工科大学、鶴見大学でも行っていた。私の母校に限定して見れば、高校生の反応も良く、楽しんでいる様子が見受けられた。実際、模擬授業を受けた私も大学生になった気分を受けられ、大学の雰囲気や教授がどのような人かわかり、志望校選びの参考になった。このような感覚から秋田大学が地域に開かれているかといわれるとそうではないような気がする。

参考として、秋田県の生涯学習の核となっている「秋田県生涯学習センター」と大学において特別聴講生になることができる「大学コンソーシアムあきた」がどのような事業をしているかみていく。

まず、秋田県生涯センターについてである。秋田県生涯学習センターは1980年4月に開所し、シンクタンク機能、研修・人材育成機能、学習活動推進・情報発信機能の3つの機能を有する。2018年度の事業実績は次の通りである。

研修・人材育成機能分野では主に地域活性や災害対策、家庭教育支援などがあり、指導者研修が

主である。開催場所は、生涯学習センターで行われているものもあれば、県北や県南といったエリアに出張する形で行われたものもある。2018年度は2つの大卒の研修が行われた。ひとつは生涯学習・社会教育関係職員研修で、参加者総数は301人。もうひとつは家庭教育支援指導者等研修で参加者総数は337人だそうだ(注6)。

生涯学習センターは自主企画も支援している。2018年では16講座が開講し、4,865人が参加した。詳細については添付資料①を参照していただきたい。講座は「秋田の自然を学ぶ会」や「秋田文学愛好会」など文理問わず、様々な講座が開講された。

ほかに、専門的な分野について学ぶ「あきたスマートカレッジ」がある。スマートカレッジには5つの大卒がある。この詳細についても添付資料②を参照していただきたい。スマートカレッジに参加すると学習手帳がもらえ、1講座参加ごとに1単位をもらえるシステムである。そして単位数に応じ称号が得られる仕組みになっている(注7)。

2018年は中央以外でも開催されたが、中央での開催が最も多く、地域によっては参加が難しいように思われる。

このように生涯学習センターではさまざまな講座が開かれており、多くが無料で受講しやすくなっている。つぎに大学コンソーシアムあきたをみていく。

大学コンソーシアムあきたは、「県内の大学等が連携・協力することにより、それぞれの教育・活動を活性化するとともにその成果を地域社会に還元し、地域の発展に貢献すること」を目的として、平成17年3月(注8)に開かれた。おもに高大連携や大学間での単位互換、講演会を開催するといったことなどが行われている。大学は秋田大学も含め14の大学が参加しており、単位を取得することが可能である。

以上、生涯学習センターと大学コンソーシアムあきたをみてきた。大学コンソーシアムあきたは県内各地にあり比較的受講しやすい環境にあるが、大学によっては学びたい科目が無いというデメリットがある。生涯学習センターの方は多岐にわたる講座が開かれているが、地域に偏りがあるというデメリットがある。秋田のように広い県では県全体をカバーすることは難しい。だが、秋田は高齢者が多く、移動手段が限られているので県全体で行うことが必要となってくるだろう。

3. 学びのニーズとは～小山澄子さんの場合～

実情を知るために、秋田大学で科目等履修生の小山澄子さんに話を聞いた。以下は小山さんから聞き取った内容を文章化したものである。

小山さんは71歳で、環境省登録の環境カウンセラー(市民部門)をなさっている方である。ほかにも秋田市立御所野学院高等学校強度学社会人講師やNACS-J自然観察指導員、マックスバリュ東北秋田イオンチアーズクラブサポーターなど環境を中心に多岐にわたる分野で精力的に活動する方である。

まずは小山さんが科目等履修生になったきっかけをうかがった。小山さんは2015年から秋田大

学で単位聴講性として勉強を始めた。これまでに教育文化学部と理工学部で科目等履修をしている。週3日程度を大学で過ごし、1日1～2科目を履修している。もともとは他の民間でやっている講座に参加していたようだ。「月2回で5,000円する受講料でなんとなく学ぶのではなく、体系的に学べること、教えるために学ぶ必要がある」と大学に先生に言われたことなどから科目等履修生に切り替えたという。そのきっかけは精神を患ったときになんとなく時間つぶしで始めたという。だが、現在は大学に来ることが楽しみになっているようだ。

科目等履修で通った大学は秋田大学だけだが、ほかに秋田県立大学やノースアジア大学の公開講座など、興味関心に従い参加している。秋田大学は単位を貰うことができ、うれしさや達成感を味わえるという。放送大学に関しては人と関わる機会がとてま少なくなりそうなのでそこで学ぶことは頭になかったという。自分の子どもくらいの年齢の先生や孫くらいの年齢の学生がどのようなことを学んでいるのかを知りたくて大学で学ぶことを決めたことも理由の一つであった。けれども学生とおしゃべりをするつもりはないと語っていた。秋田県生涯学習センターの講座にも何回か参加したという。そして得た知識は小山さんが活動している場や様々なところで社会に還元することを目標に学んでいるという。

次に科目等履修生になってから良かったことを聞いてみた。これには「先生との出会い」、「様々な分野を学ぶことができる」、「刺激になる」の3つが挙げられた。

特に先生との出会いについては熱く語ってくださった。先生方と講義終了後に一言二言お話ししたり、講義について相談したりすることができ、心強いという。先生との出会いは勉強をする上での楽しみであり、仲の良い先生や面倒見が良い先生をにこにこしながら話していただいた。多くの先生はあたたかく迎え入れてくれ、また関連する講義や参考図書を教えてくださるようで次のような講義を受けるかの参考になるという。今年の8月には、ある講義を聞いて足を延ばして古墳を見に行った帰りにその講義の先生にお会いしたという。講義の延長も面白い体験になっているようだ。

次に先ほどとは逆に履修するうえでの苦勞について聞いてみた。良かった点と異なり、たくさん出てきてさまざまな苦勞をなさっているようだ。学習、システム、先生の3つの枠に分類して聞いたことをまとめていく。

まずは学習についてである。小山さんは文系の短期大学出身だそうだ。文系科目は専門でもついていけるというが、理系になると全く歯が立たないという。数学が分からず、また関数電卓の使い方が分からない点でとても苦勞したと語っていた。だが、納得いくまで勉強することができて楽しいという。ついていけるかどうかの目安にするため、履修する際は評価方法を聞いてから受講するかどうかを決めるという。

このことに関連してシステムの上の苦勞についてみていく。

まずはパソコンが苦手なのでレポート提出やa・net、WebClassが使えず困ったという。それも勉強だと思って使えるようになったが、最初は大変だったと語る。

履修登録をするときは、時期が早すぎるため、前年度を参考に2月に4月以降の申し込み、目安の時間割を組む。だが、新年度になり時間割が変更になると、予定が狂ってしまうこともあるという。また受講したい科目がどこにあるかを探すのも一苦勞だという。

さらにそれから派生することとして、先生のことについても苦労するという。受講する際には先生から受講承認の印鑑を押してもらう必要がある。その際、親しい先生だと快く押してくれるが、学生のみ、院生のみと限定し断る先生も少数ではあるがいるという。また、オフィスアワーを設定しているのに先生が研究室にいないときや、メールでアポイントメントを取りたくてもアドレスが分からないときがあり、先生と会えずに苦労することがあるという。

最後にこれからより科目等履修をしやすいするにはどうしたらよいかを聞いてみた。

まずは受講の仕方をもっと簡単に誰でもわかるようにしてほしいという。科目等履修をするには高校または大学等の卒業証明書が必要であるという。だがこれから先学校の統廃合が起こってくると卒業を証明してくれるところがなくなった場合どうすればよいかという問題が発生するだろうと小山さんはおっしゃっていた。

私はこの卒業証明書のことが受講をためらわせる要因の一つになっているのではないかと推測した。ハードルを下げることで科目等履修生が増えるのではないかと考える。

次に学びなおしになる講座を開いてもらいたいという。社会人や一般の人が時間を作りやすい休日や夜、場所もカレッジプラザでやってもらったらもっと受講しやすいのではないかと思うが、大学の先生も大変忙しいので、調整は難しいだろうと語っていた。

さらに科目等履修生の利点を本人だけでなく、一緒に学ぶ学生にとっても良い刺激になるのではないかと語っていた。ある先生からは「科目等履修生も必要単位を取得すれば、大卒の資格を得られる」と教えてくれたことが印象深かったという。また、小山さんは、「ぜひ多くの人に大学で聴講生になってほしい」とおっしゃっていた。

以上が小山さんからのお話である。小山さんではできることなら生涯学習を続けることを目標にしていた。そう思っているのは小山さんのお知り合いにも多いという。その方を紹介していただき、またアンケート調査を行わせていただいた。

4. 学びのニーズとは ～アンケートからみる～

小山さんの紹介で教育文化学部の和泉教授が開いている外国語の講読会に出席している方にアンケート調査を行った。なおアンケートは最後に添付する。以下では順番に沿って解答をまとめていく。

アンケートには受講生9人(男性1人、女性8人)が答えてくださった。最初に年代を質問した。50代から60代が5人、70代から80代が4人だった。2つ目に職業を尋ねた。専業主婦が最も多く4人、無職または年金暮らしが3人、パートが1人、無回答が1人だった。

3つ目に勉強をする理由を聞いた。解答は様々だが、1番多い解答はスキルアップ、次に多いのは趣味だった。また脳トレを理由にする人もいた。また選択肢にはないが、学びをもっと深めたいという回答があった。

4つ目に勉強をはじめたきっかけについて尋ねた。「大学を卒業してから学びなおしたい」という声や、高卒だから大学で勉強することにあこがれを持っているからという理由があった。また、英語

の翻訳に興味があるからといった理由もあった。

5つ目に勉強のために自己投資するとしたらいくらかを聞いた。これを聞いた理由は小山さんが「秋田の人は学習にけるお金が少ないのではないか」とおっしゃっていたからだ。結果として、最低金額は0円が多く、平均の最高金額は1万円だった。最も金額をかける人は5万円だった。小山さんがおっしゃっていたことはあながち間違いではないのではないだろうか。

6つ目に何歳まで勉強したいかを聞いた。最も多かったのは生涯で4人だった。次いで、現在の年齢から考えて80歳までと3人が答え、興味が尽きるまでと答えの方が2人だった。

7つ目には勉強がしやすい環境があるかを尋ねた。9人中6人が「はい」と答え、「はい」と「いいえ」のどちらにも印をつけていない人が2人、1人は無回答だった。

「はい」と答えた人の最も多い理由は時間に余裕ができたからであった。それに加え、余裕があると継続的に勉強ができるからとする理由もあった。

「はい」と「いいえ」のどちらにも印をつけなかった人の理由の共通点は時間がある一方で環境があまりよくないという解答に見受けられる。ひとつは夫が寝てからでないと勉強できないからで、もうひとつはよく利用する公共の学習場所が騒がしいからであった。

8つ目は、勉強に関して秋田大学に求めたいことを尋ねた。最も多かった声は市民向けの講座を増やしてほしい、社会人向けの講座を開いてほしいという声で、5人の方から出た。また、以前行われたスタディツアーをまたやってもらいたいという意見もあった。それから広報活動を広いメディアで行ってほしいという意見もあった。

最後の自由記述欄には学生と学べる講座と書いてくださった方がいた。市民には大学生と交流してみたいという思いもあるようだ。

以上がアンケート結果である。

5. 小山さんの話やアンケート結果から20年後に向けての方向性

冒頭でも触れたが、これから先の秋田県は少子高齢化がますます進むであろう。少子化の中、地元から学生を取ることは難しくなっていこうと予想される。大学を魅力的にするのももちろん良いが、これから先は地域に根差した大学として地域とともに秋田大学は進んでいくべきだと小山さんとの話やアンケート結果から考える。

秋田大学は所在地である秋田市の市民から気かけられ、なじんでいると言える。一方で秋田大学が地域に開かれているかといわれると一部不親切な点や地域の声が反映されにくい状況にあると考えられる。地域とともに歩んでいくには秋田県が抱える様々な課題の解決や、専門性の高い研究も大事だが、それを支える人々の豊かな生活も大事ではないだろうか。その一端を担うのがこれまで述べてきた生涯学習や社会教育である。データは本当に小さいがアンケートで得られた解答は貴重な意見ではないだろうか。

この結果を踏まえ、学生・大学、地域の結びつきを「生涯学習」を通して強めることができるのではないかと考える。アンケートの結果には「学生の実習でもいいから公開講座を受けたい」という

意見もあった。このことからもっと積極的に学部や分野をこえた講座を開く価値は十分あるし、また中央だけではなく県北や県南での公開講座も需要があるだろう。例えば私の母校米沢女子短期大学の事例を紹介する。米沢女子短期大学では定期的に学科の枠を超えた公開講座を附属図書館主催で行っている。大きなテーマがあり、3回連続の公開講座がある。例として過去に「スタジオジブリ作品について」というテーマで、アニメ学と文学、日本史から3人の教授がテーマに沿って話した。私も参加し、各回30名程度の募集だったが、このテーマでは超満員で会場にはさまざまな年代の人が集っていた。3回連続出席で受講すると認定書がもらえる仕組みになっている。もちろん全部参加しないと分からないわけではなく、余裕がある日に受けることができ、社会人に合わせた18時30からの開講だったので受講者が多かったのではないかと思う。ちなみに今年度は全学科から各1人、研究分野からの公開で全3回開催された。すべて無料で受講できる。

学生・大学と地域が結びつくメリットのひとつとしては、両者が協力できるということができる点にある。どういうことかということ、例えば大学が地域で学生が実習したいときに、地域の実情を知っていることで実習内容も課題解決になったり、地域にあった実習になったりし、両者実りが多くまた持続可能な実習になるであろう。ひいては学生が秋田に根付き、秋田における諸課題に立ち向かう貴重な人材になりうると予測する。

また別の視点においては、地域が大学に対し理解を深めてくれるというメリットもあるだろう。理解が深まることでそこから新しい企画が生まれてくるかもしれない。例えば、私の母校である米沢女子短期大学には「アクセルリンク」という山形大学工学部、山形県立米沢栄養大学の3大学が連携したボランティアサークルがある。このサークルは米沢市が秋に開催する「なせばなる秋まつり」(注9)の企画を学生たちの力で祭りを作っていくというものである。この祭りには米沢藩藩政期に行われていた市を復元したり、子どもも大人も楽しめる企画をしたりしている。秋まつりでの学生たちの様子が目に留まり、学生たちは小野川温泉郷の「小野川温泉ほたるまつり」や「上杉雪灯籠祭りなどといった様々な行事の企画運営を任されるようになった。あくまでもサークルだが、このような学生の頑張りや地域が応援し、挑戦する場面を提供していることは良いと思う。秋田大学ではこのようなことがまだまだ少ないと思うので、地域により愛され、応援してもらえるような存在になると良いであろう。

しかし、このようなことを大学だけで県全体で行うことは難しく、協力的な先生がいるかどうか、財政面はどうするかという問題がある。

だが、まずは秋田市から始めていき、公開講座を年に1回でもいいので定期的に重ね、県全体にその輪を広げていけばよいと思う。また、学生たちを募集して地域の人と一緒に学ぶ機会を設けて異世代間交流ができればよいと思う。

よく「〇〇カフェ」を秋田大学では開催しているが、アンケート結果にあったように広報力が弱いと思うので強化することで今あるものをよりよくできるのではないだろうか。お金を取るかどうかや予算確保については、少しは参加者に負担してもらってもいいと思うが、無料であれば受講に対してのハードルは低くなるだろう。

そういった行為がいつか県全体の教育になり、研究教育機関である大学の力を最大限発することができると考える。

20年後を見据え、次のことを考える。まず20年前の生涯学習について考えてみることにした。20年前の1990年代は生涯学習振興について盛んに話し合われた時代だった(注10)。2006年になり、教育基本法の改正で、そのなかに生涯学習の理念が掲げられた(注11)。この傾向からすると行政主体で生涯学習が推し進めなれていきそうだ。だが、現実としては小山さんや和泉教授の講座に参加されている方のようにより専門的な知識を得たいと思っている方がいることは事実だ。このような人のニーズに応えるためには行政だけではうまくいかなく、大学の力が必要になる。大学だけに限らず、学びにはたくさんの種類があるから様々な分野の垣根を超えた連携が必要なのではないだろうか。その第一歩としての大学だと考える。まずは秋田大学の学内が多様な学問分野の垣根を越えて、もっと風通しのよい大学になれば地域の方々も科目等履修生になりたいと思うだろうし、学生の刺激にもなるだろう。これから20年を考えるとするともっと地域に開かれた大学であり、教育の場であってほしいと願わずにはいられない。それは大学側にとっては難しいことかもしれないが、生涯学習を通じた地域との連携を推進していくことで、20年に向けてさらに発展していくだろう。

6. おわりに

本論文では課題に対し生涯教育をキーワードにみてきた。小山さんに話とアンケート調査をもとにこれからあるべき姿を考察してみた。冒頭で予想した仮説は、「生涯学習や社会教育は生きるうえでの心の張り合いになり、また異世代の交流になるから秋田県や秋田大学の将来を見据えると積極的に展開していく必要がある」としていた。結果として大筋が当てはまり生涯学習を秋田大学が積極的に推進していくことには大きなメリットがあると結論づけた。一方で実際運営していくと秋田県の広さや協力者の存在、財政面での問題など、問題点を考えると尽きないと思う。けれどもそれ以上に、市民に専門的な学びの場を与える方が大きな意味があるだろう。そうして地域との関係が深まると、秋田大学が親しまれ、将来の学生確保を可能としたり、卒業生が秋田に定着することが促進されたり、また県民の内面からの健康寿命促進が可能となったりするだろう。従って、これからの見据えると地域とともに歩んでいくのが望ましいというのが本論文の結論である。

最後に、本論文を書くにあたって話を聞かせてくださった小山澄子様、小山様を紹介して下さり、生涯学習の分野で助言していただいた原義彦教授、アンケート調査に協力して下さった方々、その場を提供して下さった和泉浩教授には多大なるご協力をいただき本当に感謝している。アンケート調査は作り方がよくなかったにも関わらず、全員が答えてくださった。みなさんがいなければこの論文を書ききることは難しかっただろう。感謝の言葉を終わりにかけて、この論文を終わりとす。

[注釈]

- (1) 浅野経子編『生涯学習概論—生涯学習社会への道—増補改訂版』2012 理想社 p13より引用
- (2) 浅野経子編『生涯学習概論—生涯学習社会への道—増補改訂版』2012 理想社 p14～15より引用
- (3) 浅野経子・合田隆史・原義彦・山本恒夫 編
『地域をコーディネートする社会教育—新社会教育計画—』p15より引用
- (4) 浅野経子・合田隆史・原義彦・山本恒夫 編
『地域をコーディネートする社会教育—新社会教育計画—』2015 理想社 p25より引用
- (5) 秋田大学ホームページ「生涯学習」
(https://www.akita-u.ac.jp/honbu/y-bunko/b_shimin.html) を参照した
- (6) 秋田県生涯学習センターホームページ「2019事業計画・2018事業実績」
(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/41397>) p8～9「2018実績」より抜粋
- (7) 秋田県生涯学習センターホームページ「生涯学習手帳と学習単位認定」より
「生涯学習手帳と学習単位認定」(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/9929>) を参照した。
- (8) 大学コンソーシアムあきたホームページより「概要」(<http://consortium-akita.jp/>) を参照した。
- (9) なせばなる秋祭り公式ホームページ(<http://aki.yonezawa-matsuri.jp/>) を参照した。
- (10) 浅野経子編『生涯学習概論—生涯学習社会への道—増補改訂版』2012 理想社 p51を参考にした。
- (11) 浅野経子編『生涯学習概論—生涯学習社会への道—増補改訂版』2012 理想社 p24～25を参考にした。

[参考文献]

- 浅野経子編『生涯学習概論—生涯学習社会への道—増補改訂版』2012 理想社 p13～27・p50～57
- 浅野経子・合田隆史・原義彦・山本恒夫 編
『地域をコーディネートする社会教育—新社会教育計画—』2015 理想社 p9～25
- 秋田県生涯学習センター「2019事業計画・2018事業実績」
(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/41397>)
- 大学コンソーシアムあきたホームページ(<http://consortium-akita.jp/index.html>)
- 大学コンソーシアムやまがたホームページ(<http://consortium-yamagata.jp/>)

[添付資料]

- ①2018実績 自主企画グループ等講座支援の実績(4,865人)の内訳
 - 秋田の自然を学ぶ会 20回 333人
 - 秋田文学愛好会 4回 126人
 - 古典文学に親しむ会 22回 422人
 - グレアカ・健康・レクOB4回 20人
 - 洋の会 30回 626人
 - 県生涯学習インストラクターの会 5回 103人
 - あきたエコマイスター県央協議会 6回 53人
 - 生涯学習ボランティアグループ「ヤッホーの会」10回 108人

- ボランティアコーディネーター「のぞみ」13回 106人
- 俳句学習会「美の國句会」12回 99人
- 俳句学習会「須磨句会」12回 122人
- 三曲連盟 32回 809人
- あきた恵古塾 12回 39人
- 千秋太極拳 43回 587人
- スポーツC火曜クラス太極拳 24回 511人
- みらいあ育児サロン 20回 801人

秋田県生涯学習センター「2019事業計画・2018事業実績」

(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/41397>) p7「2018実績」より抜粋

②あきたスマートカレッジ参加者総数(3,881人)の内訳

- 総合開講式・記念講演 4月28日(土) 202人参加
 - ・総合開講式で、プラチナマナビスト1名、シルバーマナビスト1名、ブロンズマナビスト3名(そのうち、中学生2名)を表彰
 - ・記念講演 昭和大学教授(工藤胃腸内科クリニック特別顧問)工藤 進英氏
- 行動人講座
 - 【基礎コース】生涯学習のススメ(3回) 88人参加
 - 【実践コース】点訳ボランティアになろう(8回) 103人参加
 - ※トワイライト(19:00スタート)講座
- あきたふるさと講座
 - 【地域の魅力発信～おらほの地域自慢～】(8回) 276人参加
 - 【あきた温故知新～風土・民俗・文化】(8回) 628人参加
 - 【秋田の地域史】(8回) 830人参加 ※東大史料編纂所特別講座含む
 - 【県民読書おすすめ講座】(8回) 540人参加
- 北条常久特別講座【恋と芸術の女流文学】(3回) 233人参加
- 官・民・学連携講座【あきたチャレンジゼミ】(11回) 522人参加
- 県立学校開放講座
 - 【大館鳳鳴高校定時制課程】(18回) 125人参加
 - 【角館高校定時制課程】(18回) 228人参加
- 特別講座
 - ①「障がいのある方々を取り巻く現状を想う」
 - ②「世界から見た秋田のシェールオイル」 106人参加

秋田県生涯学習センター「2019事業計画・2018事業実績」

(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/41397>) p8～9「あきたスマートカレッジ事業」より抜粋

[使用したアンケート]

生涯学習に関するアンケート

教育文化学部 地域文化学科3年次 田口志織

本アンケートは、秋田大学創立70年を記念した学生懸賞論文を作成するうえで使用いたします。「生涯学習と大学での勉強」をテーマに一般の方々からお話を伺っております。

答えてくださったことは口外せず、鍵のついたロッカーで保管いたします。データに関しましては、個人情報が分からないように使用いたします。

ご協力よろしくお願いたします。

1. あなたの年齢を教えてください。

- a. 10～20 b. 30～40 c. 50～60 d. 70～80 e. 90～

2. あなたのご職業を教えてください。その他の場合は()にお書きください。

- a. 学生 b. 社会人 c. 専業主婦 d. その他()

3. どのような理由で勉強をしていますか。1～3で順位をつけてください。

その他の場合は()にお書きください。

- a. 仕事で使うから b. 資格取得のため c. 学生時代を満喫したい d. 脳トレのため
e. 暇つぶし f. 趣味だから g. スキルアップ h. 友人づくり
i. その他()

1.	2.	3.
----	----	----

4. 勉強をはじめたきっかけを教えてください。

5. あなたは勉強のための自己投資をどれくらいできますか。

参考として秋田大学の入学金が28200円、授業料は1科目14000円です。試験または学修成果をもとに単位が出ます。秋田カルチャースクールの英会話は月3回で6000円、1回の授業で5000円など価格帯はまちまちです。

解答例：無料がいい場合は0円、最大で3万円かけてもいい場合は0～3万円のようにお答えください。

6. 何歳くらいまで勉強を続けたいですか。

7. 現状は勉強しやすい環境ですか。理由もお答えください。(はい・いいえ)

8. 勉強に関して秋田大学に求めたいことはなんですか。

9. その他ご意見がありましたらお書きください。

10. 聞き取り調査にご協力いただける場合はご連絡先をお書きください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。